

大構造改革の焦点はどこにあるか第5号(2001年12月25日)

第5回 ブラックホールから脱出への道

その2 デフレ・とじこもり安楽死経済から脱出の鍵は何か・・・お金の経済から本物の付加価値を創造する実物経済ベンチャー国家への変身

<目次>

1. 農耕民族に課せられた最大の試練・日本版構造改革・・・学ぶこと、闘うこと、リスクに挑戦すること、死ぬこと、汗を流すこと、創り出すこと、自立することを忘れた平和呆け国民に対する世界の警鐘

2. 市場経済外圧軍によって解体・再生される日本のもたれ合い国家信用経済システム・・・土地・銀行株・企業株式まで国際マネー投機市場強者に振りまわされ国家信用経済システムの崩壊とデフレ経済に追い込まれた市場経済敗戦国家の惨状

3. 国家再建はリスクに挑戦し汗を流し知恵を絞って創り出す本物の付加価値作り・・・国をあげて国際的リーディング商品を創り出す実物経済・ベンチャー経済国家へ変身すること

アメリカ市場経済原理主義とイスラム原理主義が激突する中で日本のバブル処理もいよいよ心臓部門の手術に拡がり、金融・企業・財政経済システムから教育、社会システム全般に亘って大構造改革が行われようとしている。

大袈裟に言えば日本版天動説型社会から国際的地動説社会への転換期を迎えつつあるのである。混乱は避けられない。

問題は、大構造改革の出口の灯りの求めかたにある。

明治の文明開化、第2次大戦後の復興から追いつき追いこせの時代のような期待に満ちた灯りが見えないまま、今のところ半信半疑の中で破壊が先行し本物の出口の灯りについてははっきりとした考え方が生まれていないところに暗さがある。

今回はその出口の灯りを求めて考えてみることにしたい。

1 .守られた農耕民族に課せられた最大の試練・日本版大構造改革・・・学ぶこと、闘うこと、リスクに挑戦すること、死ぬこと、汗を流すこと、創り出すこと、自律することを忘れた平和呆け国家に対する世界からの警鐘

日本はたった10年で100年もかけて作ってきた接ぎ木システムを一気に破壊しなければならないまでに追いこまれてしまった。つい20年ほど前、奇跡の成長国家ともてはやされ土地永久成長神話に踊らされた幻の金融資産、債権大国の繁栄の夢も一瞬のうちにはげおち、今度は一転して世界のお荷物ともなりかねないサラ金依存国家として国債の格付けをどんどん引下げられる国になってしまいつつある。

(この束の間の繁栄と崩壊は何故おきたのか。)

それは日本が数千年もの間、守られた島国の中で外来文明をうまく取り入れ特定の思想、哲学を持たず、為政者をぐるぐる回りに交替させながら外来文明をうまく取り入れ平和に暮らしてこれた世界でも珍しい天動説型の社会構造を保ってこれたからともいえる。

その天国社会が、いよいよ他の地動説国家と同じような厳しい本物の競争社会システムを持つ国家へと大転換せざるをえない最後の局面に追いこまれている。

その引き金をひいたのが、第2次大戦後アメリカ型資本市場への異常な急接近にあった

といえる。

考えてみると日本はあまりにも無知で不用意な田舎の俄か成金国家だったのである。それは 200 年以上もの年月をかけ失敗を繰り返しながらも日々新しい工夫を加えて創り出したアメリカ型のベンチャーを基盤とする資本市場競争メカニズムの本質を学んでいなかったことである。

そして形だけ真似た証券、金融、資本市場システムから企業、財政、土地システムなど国の基本信用経済メカニズム全体がアメリカ型のマネー経済システムにひきずりこまれ攪乱され、とうとう市場経済サラ金国家にまで転落してしまったのである。

しかし、不思議なことに、日本ではその失敗原因を明らかにすることもカラクリを学ぶこともなく不良債権と公的債務が増え続ける原因を避け難い天災論として捉え、皆んなでビボウ策だけを繰り返してきたのである。

そして何時の間にか本物のサラ金経済に追いこまれながらものどかに暮らしている世界でも珍しい国になってしまったのである。

(水割り酒では隠しきれなくなった国家の衰退現象)

アメリカの格付会社ムーディーズでは日本の国債の格下げ理由について「国家としての対応能力を失った言わば脳死状態にあるから」であるとその本音を漏らしている。

日本では今まで GDP、景気動向、株価、金融資産、財政規模など他の先進国と同じような経済指標をベースにして経済活動が報道されてきた。

しかし、あまり表に出ない負のデータを見ると慄然とさせられるのである。

日経新聞の末村さんは 13.12.2 の記事で上場会社約 2 千のうちで過去 12 年間 (1989 2001) の投資収益率 (株価と配当金) がプラスだった企業が僅か 64 社 (3%) にしかないとその惨状を訴えている。

又、日本の少子化高齢化は産業界にも及んでおり老成化する上場企業の予備軍となるベンチャー企業の供給活動は国際比較から見ると桁外れに少ない。(GDP に対する VC 投資の割合はアメリカ 0.5...イスラエル、カナダ、韓国、シンガポール、ベルギー、英国... 14 番目日本はアメリカの 20 分の 1 程度 (1999 年) と見られている)

こうしてみると我々は何十兆、何百兆もの公的債務、不良債権の莫大な金額に不感症となってしまうと足もとの厳しい現実を忘れて、その場しのぎのピボウ策を繰り返している間に国家の現実の基礎体力は想像以上に低下してしまっているのである。

平成 12 年度、全国上場会社 2555 社の当期利益は 3.9 兆円。ROE 2.17% (米 12.9、英 11.4、独 12.1%・・・20 年前の日本 当期利益 4.5 兆、ROE 11.25%)・・・東証統計月報

上場企業の 1 年間の企業利益が 3.9 兆円しか上がらなくなってしまう国が毎年 30 兆円の借金をし毎年十兆円以上の利息を払っていても国家胴元が破綻してしまうのは当然のことなのである。

(戒律を持たない国の悩み)

日本は、こうした厳しい衰退の現実を目を向けることを忘れて、实体经济から遊離した一見華やかに見える市場経済の持つ甘い誘惑に負けみんな計算を誤魔化して自ら水割り酒経済の陥穽にはまってしまっていたのである。

そしてそののどかな国の借金問題に見かねて世界からいろいろとクレームをつけられ、やっと日本でも自己戒律を必要とする国際ルールの中で、みんなで競い合う国際地動説社会システムへの転換を迫られることになったのである。

問題はその警鐘の意味の受けとめ方と改革の方法と出口の灯りの中味にある。

ローマの歴史に委しい塩野七生さんは「宗教的戒律を持つ一神教社会は迷った時に頼れる戒律が援けになって再起し易いが、日本のような特定の戒律を持たない多神教の国は、バランスが崩れた時、頼るべき戒律を持っていない分だけ混乱が長引くのではないかと」心配しておられる。

考えて見れば、自ら特定の戒律も基本哲学も持たず「与えられた平和」と「公平分配」という受け身の考え方だけでうまくやってこれた天然構造国家であった分だけが突然そのバランスを崩した時の対応ほど難しいものはない。

2 . 市場経済外圧軍の手によって解体・再生されるもたれあい国家信用経済システム  
…土地、銀行株、一般企業株まで国際投機市場強者に振りまわされ、国家の基本信用経済システムの崩壊とデフレ経済に追いこまれた市場経済敗戦国の惨状…

本格的構造改革への着手をきっかけに十数年トバシにトバシを続けて難を逃れてきた日本のバブル経済の後始末処理は一気に加速しはじめた。

今までの日本をリードしてきたリーダー達は一様にバブルの発生原因について自ら説明する努力を避け、皆んなで口を閉ざして天災論にすりかえてその日その日をしのいできた。しかし、いよいよ国際社会からの圧力の援けも借りて、このバブル経済の後始末という大難題を解決せざるを得ない時を迎えた。

それは幕末の文明開化のための開国、第2次大戦敗戦国の民主主義の導入と復興作業のような希望に満ちた自己改革ではなく出口の見えない外圧頼みの破綻処理の悲しさがある。

問題は本来、独立国としての威信と自ら国家信用力をもって守るべき日本型金融、企業、資産、財政システムのバブルの後始末を弱肉強食の世界で生きてきた世界の市場経済強者の援けを借りて行わざるを得ないところに市場経済敗戦国の悲劇があるのである。

(1)その最大のポイントは、土地、金融資産、企業信用など今まで国家信用によって支えられてきた国富の大半が、国際資本市場メカニズム強者が創り上げた「開示」要求戦略と「時価」評価支配力の中で競われる市場競争の対象としてひきづりこまれ一国の国家信用経済システムが破壊されてしまったことにある。(開示要求圧力と時価会計制空権圧力に屈して守れなくなった国家信用システム…市場に占領された国)

(2)本来、国家信用機構の手で行われるべき金融機関に対する検査・監督システムが崩壊し、国際投機市場競争強者の求める短期収益追求の観点から一国の金融システムと、長期産業経済システムを評価・選別するための検査が行われようとしていること。(国際短期マネー市場経済占領軍による金融システム改革と企業選別のための検査の執行)

(3)又、短期的投資利益追及目的を持つ投資銀行の手によって短期投資非適格企業への融資の打切りが行われていること。(短期マネーによる企業選別)

(4)市場投機圧力を利用した市場退出期待企業の選別絞りこみに乗じて、借り株空売りを利用した相場操縦行為・情報操作行為が公然と行われ市場経済強者による投機利益の収奪が放置され市場経済無政府状態を招いていること。(首つりの足を引っ張って儲ける解体・売り屋の横行)

こうした混乱は、本来国家信用と自己規律によって守られるべき財政・金融・企業経済システムが公益軸としての掟を持たないむき出しの収奪型証券市場競争の嵐に晒されて破壊され、国家としての規律が失われてしまったことを意味している。

問題はこうした他力破壊力の援けを借りたサラ金地獄経済システムの改革の先にどのような出口が待ち構えているかである。

腐敗の摘出と外圧利用の強制決済だけではサラ金地獄は解消されることはない。又集団安楽死指向もデフレ経済をとめることは出来ない。

果たしてこのままで、外圧占領軍ベースによる解体・再生作業の進行と短期利益追求型の市場経済従属国としての道を傍観するだけで良いのであろうか。

3 . 国家の再建はリスクに挑戦し汗を流し知恵を絞って創り出す本物の付加価値作りにある…

…国をあげて国際的リーディング商品を創り出す実物経済ベンチャー経済国家へ変身すること

(1)このような国家非常事態を迎える中で、日本の半導体、自動車産業の国際競争活動に貢献してこられた三輪晴治さん（現マグマ・デザイン・オートメーション社長）は重要な提言をされている。

それは他国のアイデアを利用して物を作る「製造業国家」から自国商品の「企画設計力」を世界に広める国家への変身の必要性である。

その提言への背景にあるのは危機を迎えている日本と世界の経済環境に共通する特別の異常現象があるからであると説明しておられる。

具体的には

1.世界の人達を充足させる新しいリーディング商品が枯渇した時、収益だけを貪る詐欺的行為だけがはびこって世界の経済システムは混乱し、経済恐慌が発生する。（1929年・2000年）

2.この新しい商品を供給するシステムは、物・金一体となって付加価値を創り出して広める

アメリカ資本市場の基本メカニズム「証券」＝「商品」＝「付加価値」の分売システムが参考となる。(ルイ・ロス…アメリカ証券市場メカニズムの基本哲学)

3.その「証券」「商品」を創造するためには、夢と失敗と結果的詐欺を容認しながら、そのロスを吸収できるシステムを持った広いグレイな土壌と、つぎつぎと無限にベンチャー企業を生み出す証券・資本市場型のザ・マーケットのシステムが必要であること。(「証券」とは何か…工夫を収益に結びつけるスキーム…アメリカハウイ判決)

4.同時にその創造力の本当の値うちを判断するための自己鑑識力と選別・執行・決済機能が必要であること(アメリカ証券市場法…ルール 10b-5…SEC 機能)

5.又その創造力をサポートするベンチャーキャピタルを持続的に供給する特別の金融システムが必要であること(投資契約とベンチャーキャピタルの供給システム)

6.供給されるリーディング商品の品質レベルが向上するにつれてリーディング商品のうつり変わりが激しくなるので、数多くのリーディング商品を持続的、爆発的に創造・供給させることの出来る「国家的基本戦略」と社会のインフラ構造が必須の要件であると説明しておられる。

(2)「企画設計」「リーディング商品の供給」「付加価値創造」「ベンチャービジネス」の繁栄のモデルの原形はアメリカの資本市場メカニズムにある。

アメリカがベンチャー国家への道を歩みはじめたのは1929年アメリカ大恐慌が始まる前1914年の金融独占、マネーバブル、腐敗、浪費、不況の繰り返しに悩んできた第28代ウィルソン大統領の時代からスタートとしているのである。

ウィルソン大統領は「アメリカの富は既存の支配階級から生まれるものではなく、未知の人たち(unknown)の創造力(origination)と発明(invention)と野心(ambition)によって作られるものであると述べ外へ向って発展する本物のベンチャーこそが国民経済の活力の原動力である」と国民に訴え続けてきたのである。

アメリカは100年も前からこうした自由、独立、競争を国是とするベンチャー発想を貫いて社会構造改革を行ってきたからこそ1929年の大恐慌の失敗もこの基本哲学をベースに自ら克服し血と汗を流し、大衆の知恵を生かして支配を排除し現在の資本市場のメカニズ

ムを創り出すことに成功してきているのである。

今、日本に襲いかかって外圧決済を迫っているアメリカ型のメカニズム競争圧力の背後には、常に新しい証券、商品、付加価値を生み出し広めようとするベンチャー国家としての基本メカニズムとそれに支えられた広い裾野が広がるベンチャーマーケットがあるのである。

残念ながら日本は中身のない嵩上げ資産から経済活力が生まれると錯覚して形と量だけ膨らませて繁栄と考え国民経済を支えるエネルギーが裾野の広いベンチャー活力から生まれることを忘れていたのである。

### (3)「企画設計」「リーディング商品の供給」「付加価値創造国家」に求められる条件

追いつき追いこせのスローガンのもとに先進国のアイデアを真似て生活必需品の「製造」に励んできた日本にとって、模倣を許さなくなったアメリカと製造コストで競う中国の出現は致命的な打撃を与えることになった。

しかし、日本が自力で本物の付加価値を創造するリーディング商品を供給する企画設計力を持ったベンチャー国家に変身するには大きな壁が立ちはだかっているのである。

1.それは日本が長い間失敗、リスク、結果的詐欺の発生も許さないクリーンで安全な農耕型の社会を保つことが出来たことに加えて、第2次大戦後与えられた平和に慣れリスク社会への参入に必要な血と汗を流し、知恵を絞り出す工夫を忘れて生命活力が退化し、とじこもり、養老院指向が高まってしまっていること。

2.大企業、集団、組織従属の習慣の中で社会主義的平等分配思想が広がり、狭いタテ社会の中でお互いに個人活力を封じ合う社会を作ってしまったこと。

3.天とお上を胴元とする限られた空間の中で財政、銀行を中心とする元本保証・資金分配型の間接金融システムに慣れ新しい商品を生み出すために必要なリスクキャピタルを供給する金融システムを育てる土壌がなかったこと。(リスクキャピタルの持続的供給、投資契約の欠落)

4.加えて安保体制の中で、アメリカ経済の傘からはみ出る新しいインベストが封じこめられてきたこともあって国家戦略としてのベンチャー育成政策が事実上機能しないまま形だけのベンチャー論でお茶をにごしてきたこと。



5.なかでも最大の壁は、こうしたベンチャー型の資本市場育成のために必要な法・会計システムなどの基本的社会インフラメカニズムが国民的合意の上で創り出せないまま、既存の村の掟をベースにした曖昧なルールのまま生死をかけて損得を競う本物の市場経済に参入してしまっていることにある。

クリーン安全な製造業社会からグレイ、不確実、未知の世界に飛び込んで新しい「企画設計力」と「付加価値」「創造力」を生かしリーディング商品を供給するベンチャー国家へ変身するには革命的努力を必要とする。

それは日本にとって天動説社会から地動説社会への転換を意味するほど価値観の大転換が必要である分だけ付加価値創造に焦点をあてた新しい考え方の資本市場システムの掟を創り上げることは容易なことではない。

しかし、国際化・市場化に煽られ葉を繋らせ過ぎで体力を消耗し肝心の根を弱らせてしまった植物国家が再建するには、自ら血を流す覚悟で自らリスクに挑戦し汗を流し知恵を生かしてベンチャー国家として基盤を作りかえる努力をするより外に道はないのである。

何時までも安全な本丸に群って救済資金の公平分配を待っている間に動物としての生命競争力は確実に衰えていくのである。

( 次回の予定・・・付加価値創造型の市場経済国家への変身に必要な構造改革のポイント・・・10b-5 ほか )